

景行天皇と口之津

松尾壽春

景行天皇は、果たしてこの口之津に行幸あそばされたのか否か。長い間気になって仕方がなかった。それは大正七年口加職員会発行とされる口之津村郷土史のなかに次の一文を見つけたときに始まるから、三十数年前のことになる。気の長い話しだが、遠い上代のことを考えるのだから、このくらい悠長に構えてもよいかと今もって託っている。

「宮崎鼻ノ名稱

第十二代景行天皇筑紫ニ御下ノ節肥後八代ヨリ南高来郡ニ渡リ給ヒ御船ヲ此ノ地ニ寄セ陸ニ上リ給ヘリト云ヒ、或ハ玉名郡長緒濱行宮ニ丘リテ来島ノ地ナリ依テ此ノ名アリト云フ
(旧記ハ有馬ノ乱ニ紛失ス)」

景行天皇は、第十二代の帝で紀元前十三年に降誕され、西暦百三十年に崩御されるまで、在世百四十三年の超長寿を全うされており、天皇在位も七十一年七月十一日から百三十年十一月七日の崩御まで五十九年の長きにわたつたとされる。

にわかには信じがたい数字である。このように現実には起こ

りうる筈がない年次代を可能な限りその時代に即したものに近づけるために、修正年表なるものが作られているが、こちらの方も諸説あり一定しない。作家の司馬遼太郎氏などは日本書紀の記述そのものを虚偽として捉えており、景行天皇の存在自体に否定的だが、その一方では記紀の研究者が後を絶たないことも実に愉快なことである。

私はここ数年、記紀や風土記の解説本、地名辞典など二十数冊をあらためて読みかじるうちに、有明海の霧が少しずつ薄まり、景行天皇と口之津の関わりが朧気ながら見えてきたような気になってきた(だけのこともかもしれないが)。口之津の歴史と風土第二号が発行されるに際し、景行天皇と口之津の関わりについて、手前勝手な理屈をこね回しながら、史談协会会员各位を一刻だけでも古代のロマンスに誘うことができれば幸いである。

☆

それではまず、数冊の書物の関連部分を引き写すことから

始める。

「風土記 久松潜一校註 昭和三十四年初版 読み下し文

高来郡、郷九所里二十一、驛四所、烽五所。

昔者、纏向の日代の宮に御宇しし天皇、肥後の國、玉名の郡の長渚の濱の行宮に在して、此の郡の山を覽りまして、曰りたまひしく、彼の山の形、別嶋に似たり。陸に屬ける山か、別居る嶋か、朕知らまく欲ふ、とのりたまひき。仍ち、神の大野宿禰に勸せて、看しめたまひしに、此の郡に往き到りき。爰に人あり、迎へ来ていひけらく、僕は此の山の神、名は高来津座とまをす。天皇のみ使來ませりと聞きて、迎へ奉るのみ、とまをしき。因りて高来の郡といふ。」

風土記の解説書は数多く出版されており、傍訓についても異なつた表示がみえる。例えば「高来津座」は「高来津座」や「高来津座」としているものもある。

次に記すのは、平成十三年初版の平凡社日本歴史地名大系四三長崎県の地名四五八頁の記述である。

「景行天皇が肥後國玉杵郡長渚濱(現熊本県長洲町)にいた時、島原半島が陸続きか島かを確認させるため神大野宿禰を派遣した際(肥前國風土記)、神大野宿禰は口之津に船を寄せ

たという。」

次に紹介する文章は、昭和六十二年発行の角川日本地名大辞典四二長崎県版一三七〇頁の口之津町沿革にある。

「日本書紀には、景行天皇が肥前國高来郡から肥後國玉杵名村に渡つた時の乗船地が口之津であつたと伝えていることから、島原半島沿岸の土豪は早くから口之津を港として利用していたことが考えられる。」

玉杵名村とは、今の玉名市若しくは長洲町付近のことである。最後に日本書紀卷第七景行紀のなかの一部を引き写す。

「六月、辛酉朔癸亥、自高来縣、度玉杵名邑……」

つまり、六月三日、高来郡から玉杵名邑つまり現在の玉名市付近に渡つた……と記されているようである。

以上のとおり、諸説入り乱れ、地名表示も異なっているが、要約すると次の四通りに纏めることができる。

一、景行天皇が八代から船出して上陸なされた地が口之津の宮崎鼻である。(口之津村郷土史)

二、景行天皇が熊本県長洲町の行宮から島原半島を眺めて、島か半島かを確認させるために神の大野宿禰を遣わした(肥前國風土記)が、そのとき神大野宿禰が上陸した地

が口之津である。(平凡社日本歴史地名大系)

三、景行天皇が熊本県長洲町の行宮に在したときに、来島された地が口之津の宮崎鼻である。(口之津村郷土史)

四、景行天皇が高来郡から玉名に渡ったときの乗船地が口之津である。(角川日本地名大辞典)

☆

それでは、景行天皇と口之津は具体的にどのような接点があったのか、各書の文言を切り刻みながら、そろりと探りを入れてみることにする。

まずは口之津に到るまでの足跡をおおまかに紹介したい。

纏向の地(現在の奈良県桜井市)で天下を治めていた景行天皇のもとに、景行十二年七月九州の熊襲が背いたとの知らせが届き、天皇自ら九州征途の旅に出ることになった。同年八月十五日に大和を発った後、九州の地における景行天皇の足取りについては概ね次のようになっていく。まずは瀬戸内海から今の福岡県行橋市付近に上陸し、大分県、宮崎県と南下しながら各地の土蜘蛛を従えている。そして最大の目的である熊襲征伐のために日向に拠を構え、ここでの交戦に六年間の歳月をかけたとされている。その後宮崎市付近から綾町、

小林市を経て人吉市に到るが、この間においても熊襲征伐が

続いている。こうした熊襲は、球磨贈於(風土記)、熊曾(古事記)の表記もあるが、日向をはじめ人吉や隼人、大隅など主として中・南九州に覇を争っていた土蜘蛛(土豪)であるとされている。(もともと、日本書紀や風土記は勝者の論理であり、権力に服しなかったから討伐の対象、つまり邪魔者扱いされているだけのことはあるが)。人吉付近で漸く熊襲退治という九州巡幸の最大の目的を果たした景行天皇一行は、その後水俣、八代へと進み、ここからはこれまでの数年にわたる陸路での行軍に別れを告げ、再び海路での巡幸となる。

☆

ところで八代市付近では、景行天皇にまつわる伝承が多く残されているようである。本稿の記述を始めたころから、なるべく早いうちに一カ所でもその地を訪ねたいと考えていた。そうした折り、今年一月八代市の日奈久温泉に一泊する機会があったので、突然ではあったが八代市の田辺達也氏に宿から電話を試してみた。昨年十月の口之津史談会例会に、佐賀県の古川清久氏と一緒に出席をいただいた河童共和国の大統領である。大統領は公私ともにお忙しいようであったが、時間

をやりくりしていただき、電話した翌日の朝九時から謁見が叶うことになった。引見の場として指定された共和国の入国管理事務局は、大統領が経営する印刷出版会社にあり、河童に関する資料で埋め尽くされていた。お話を伺い、言葉を交わした内容の記述は省略するが、終わりにどうしても見ておきたかった水島への行き方を教えてもらい、一時間を超える訪国談義を終えた。

日本書紀景行紀解説本に、「景行天皇が海路葦北の小島に渡り、食事の際に冷たい水を求められたがどこにも水がなく、従者が天を仰いで祈ったところ、小島の崖から冷たい水が湧いてきたため、水島と名付けた」とある。名前の由来にもなった泉は、昭和三十年代に枯れてしまったという。現在の水島は球磨川の最河口部となっており、住家一軒を建てるのがやっとと思えるほどの小島であった。球磨川の濁流と八代海の風浪で細ってしまったのであるか、高さ十メートルほどの岩肌は今も崩壊の危機に瀕しており、史跡保存工事の途中であった。帰宅後暫くして、八代市の田辺氏から水島に関する詳しい資料をお送りいただいた。ご自身がお持ちの資料だけでなく、八代市教育委員会文化課の学芸員に問い合わせ取り

寄せられた資料まで添えられていた。頂戴した資料によると、江戸時代末期水島を含む一帯が細川公の命によって干拓地とされてしまう危機があったが、日本書紀に載るほどの史跡は残すべきであるとして、この計画に身命を賭して反対した一人の藩士が居たという。現代なら兎も角、封建社会のなかにあつては並の勇気で出来ることではない。その名を和田殿足(いわたり)といい、細川藩士としては不遇であったが、国学者、文人としての評価が高いとされる人物である。

☆

八代海からは有明海に船を漕ぎ出すことになるが、このあたりからいよいよ口之津との絡みが始まる。

八代海を北上し、景行十八年五月一日に宇土半島に到着、そこから三角の瀬戸を通り有明海に漕ぎ出した天皇の御座船は、先ずはどこを目指したのであるか。この点については、日本書紀や風土記にも記されていない。日本書紀には高来県(島原半島)から玉杵名邑(玉名市付近)に到着したと記され、肥前風土記には長渚の濱(玉名市付近)から島原半島を眺めて云々と記されているだけである。ここで輝きを増すが、冒頭で紹介した口之津村郷土史の一節である。その一部

をもう一度紹介して、大胆な推理に移る。

「宮崎鼻ノ名稱・第十二代景行天皇筑紫二御下ノ節肥後八代ヨリ南高来郡二渡リ給ヒ御船ヲ此ノ地ニ寄せ陸ニ上リ給ヘリト云ヒ・・・」

日の出を待つて、八代海から三角の瀬戸經由で有明海に入つた景行天皇一行は、対岸の島原半島を目指しつつも僅か数時間で早崎瀬戸付近まで流されてしまつた可能性も否定できない。ときは旧暦五月一日、新月大潮の頃である。朝八時過ぎには潮が引き始める。有明海の湾奥から入口に向かって流れる引き潮に乗り、数時間後眼にしたのは早崎瀬戸の急潮だったかもしれない。早崎海峡の大渦に危うく巻き込まれそうになつた天皇の船団は、急遽口之津の宮崎鼻や湊に着岸、上陸したのではなからうか。危急を脱した一行はそこであらためて船団を整えた後、今度は上げ潮を掴んで長渚濱（玉名市付近）に向かつたとしてもおかしくはない。なぜなら、八代から口之津に渡られたとする口碑伝説は口之津村郷土史に残されているが、八代から直接玉名に渡られたとする伝承は、前述したとおり私の知る限りでは他には見あたらないからである。

推理を続けよう。口之津から船出して玉名付近に到着した景行天皇は、その地に行宮を構えている。玉名の行宮に落ち着いた景行天皇は、肥前國風土記にあるように、長渚濱から島原半島を眺めて、対岸の雲仙岳の聳えている地が島か半島かを調べるために神大野宿禰を遣わし、そこで高来郡の地名が起こつたとされている。しかしながら疑問も残る。神と云いながらも大野宿禰はあくまで使いの者である。肥前風土記の記述は、大野宿禰に土地の命名権があるかのような言い回しになっているが、ここは慎重に考えたい。景行天皇の九州巡幸は、天皇の版図を再構築し、大王としての権威を誇示するための旅である。このことから考えれば、大王自ら直接地名を言い渡すか、若しくは大王は上座に鎮座坐して勅は重臣が伝達することの方が、演出効果として格段に高いことは言うまでもない。江戸時代における將軍に対する直参旗本の御目見制度がそれであるように。

では考えにくい。

神大野宿禰が先遣隊として口之津に入り、高来津座の出迎えを受け、高来郡の地名を言い渡すための儀式には景行天皇が鎮座坐していたであろうことはすでに述べた。では具体的に口之津のどこで高来郡の地名言い渡しの儀式があつたのだろうか。三軒屋にある口之津貝塚の付近かもしれないし、烽火山の頂上や口之津灯台付近も有力な候補地として外すことはできない。今の二倍ほど広かつた口之津の湊と、それを取り囲む丘陵地、当時の地形を思い描き、命名式に思いを馳せるとき、想像するだけでわくわくした気分になり、気持ちの高揚を抑えることができない。眼を瞑ると厳かな式典の様子が臉に浮かぶようである。

☆

さて、それではこれから先の景行天皇一行の順路はどうだつたのだろうか。日本書紀には現在の長崎半島や西彼半島、五島、平戸などに行幸された記述は見あたらないが、肥前國風土記には長崎県の沿岸部を回航されたとある。その中のいくつかの地名を追ってみる。

浮穴郷 諫早市有喜町

先述したように、景行天皇一行は有明海の潮流という自然のいたずらとは云いながらも、すでに一度は口之津の湊に入っている可能性が高い。そうであれば、船を陸に着けるときに、全く地理不案内の所よりも一度は接岸したことのある湊を選ぶ確率が高いことは云うまでもない。口之津村郷土史の口碑伝説にある「長渚濱行宮に丘りて（口之津に）来島の地なり」という記述を裏付ける状況証拠と云えよう。さらに言えば、当時の島原半島のなかで天皇の使いが船を着け、次いで天皇一行の大船団が一度に着岸できるだけの適地がどれだけあつただろうか。島原半島東岸は遠浅の地が多く、船を直接接岸できる地を探すことは容易ではない。今の島原市の九十九島付近は一七九二年の普賢岳大爆発と大地震によつて眉山が崩落してできたとされており、それまでは遠浅の海岸であつたと考えられる。当時の船は、今でいう伝馬船かそれより一回り大きい程度の小型船ではあつたろうが、百艘単位と想定される船団が一度に舫うことができる湊は、口之津以外

速來門 佐世保市早岐瀬戸

志拭嶋 平戸島南部の志々伎崎

植嘉郷 五島列島小値賀町

このように並べてみると、おのずとその行程が見えてくるが、本稿はここでしばし雲仙市に寄り道する。

肥前國風土記には高來郡の段で記述したほかにも、島原半島について書かれている。その残りの部分を読み下し文とともに紹介しておきたい。

土齒の池 俗、岸を言ひてひぢはと爲す。郡の西北にあり。

此の池の東の海邊に岸あり。高さ百丈餘、長さ二百丈餘なり。西の海の波濤、常に濯ひ滌けり。土人の辭に綠りて、號けて土齒の池といふ。池の堤の長さ六百丈餘、廣さ五十丈餘、高さ二丈餘なり。池の裏は、縦横二十町餘許なり。潮來れば常に突き入る。荷・菱多に生ふ。秋七八月には荷の根甚甘し。季秋九月には香と味と共に變りて用ゐるべからず。

千々石海水浴場の松林を左に見ながら走る国道五十七号の右側は、豊かな田園地帯が広がっている。平地に別れを告げ急坂にかかるカーブの右手一帯は、今ではすっかり埋め立て

られて立派な畑になっているが、十五年前までは蓮根が広く作付けされており、味の方も評判が良かったと聞いた。風土

記にも荷根甚甘、つまり蓮根がすごく旨いと記されている

が、七、八月が美味くて、九月には香りと味が変わってまじいというのは解せない気もする。千々石町郷土誌によると、

十五年前まで栽培されていた千々石町の蓮根が数百年の歴史があつたとするには資料が乏しいとも記されており、残念なことである。

閑話休題

口之津の湊を出た大船団は、潮時をみて早崎の瀬戸を超え橋湾を北上し、湾奥の有喜郷で浮穴沫媛という土蜘蛛を誅伐している。その際に、景行天皇が長渚濱の行宮から眺めて疑問としていた例の「島か、半島か」の件はここでははっきりと解決したのではないかと考えられる。小競り合いとはいえず喜で土蜘蛛と交戦したことを考えれば、付近の高台も戦いの場であつたに違いない。東南東の方角にあたる雲仙岳を正面に見据え、有明海と橋湾を左右に見る分水嶺付近で「陸に屬ける山」であることを、天皇自身が自分の眼で確認し納得されたのではなからうか。数日前に口之津の地において高來津

座から聞いておられたことではあるが。

肥前國風土記によると、その後長崎半島の野母崎樺島を迂回、西彼半島西岸を北上し、早岐、平戸から小値賀島を巡ったとされている。この行程では、各地ですでに恭順の意を表していたか、あるいは進んで臣下の礼を示したものとみえ、大きな戦の記述は残されていない。このことは、五月上旬に長洲を発ち、口之津から平戸、五島を巡った後、行宮を構えている長洲に帰還するという航海を、約一ヶ月という短期間で終えることができたことの証でもあろう。

日本書紀によると、景行天皇一行は、景行十八年六月三日高來県から玉杵名邑に到着とされている。では、ここに書かれている高來県とは、具体的にどの地を指すのであろうか。私は、景行天皇が長崎県の西沿岸、島々などを巡察した後、再び口之津に戻ったと考えることがごく自然であることから、高來県の「口之津から」玉杵名邑に到着とすることが行程上からも極めて自然であると考えている。

ここであらためて、五月一日から六月三日までの、景行天皇の足取りだけを追ってみると、宇土半島・三角の瀬戸↓口之津↓長渚濱↓口之津↓有喜↓早岐・平戸・五島↓口之津↓

長渚濱ということになる。

以上のとおり、これまで大胆な推理と傍証によつて、口之津を一つの核と位置づけながら、景行天皇の西国における歩みを探ってきた。結果として冒頭部分で紹介した各書の記述を纏めた四通りの説が全て溶け込んだものとなった。些かでも領くことができる点があつたか否か、はたまたこれほとんどもないこじつけであると映ったか、それは拙文に眼を通していただいた方々の判断にお任せする以外にない。

☆

残る紙面も僅かとなった。ここまでは景行天皇の巡幸地を推理することに紙面を費やしてきたが、その年代については冒頭に記しただけで、殆ど触れていない。もつとも、紀元から三、四世紀にかけての時代考証は、私のような素人が口を差し挟むことができるほど簡単なことではないが、本稿を書き進めるなかで、ほぼ間違いないであろうと考えたことを一点だけ記しておきたい。

今回幾度となく眼を通した肥前國風土記であるが、各地を記述する段落毎に、必ずと言ってよいほど次の文面が繰り返されている。

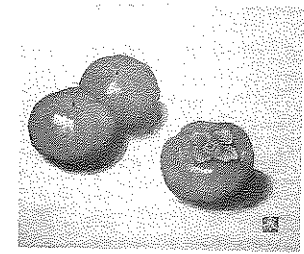
「昔者、纏向の日代の宮に御宇しし天皇」

天皇とは勿論、纏向（今の奈良県桜井市）に在った日代の宮で天下を治めておられた景行天皇のことである。ところで、この纏向に都が置かれたのは、諸説あるなかで、三世紀後半とする説が有力とされている。これは、遺跡発掘による出土品によつてかなりの説得力をもつて語られている。もしそうであれば、景行天皇の即位は、三世紀後半以降ということになり、日本書紀の記述よりも大きく繰り下がってくることは必定である。景行天皇の在位は、三七〇年から三八五年までの十五年ほどとする説もある。

次に、卑弥呼が統治したという邪馬台国と大和王朝との関連について、簡単に触れておきたい。邪馬台国が在ったとされる場所については九州説と近畿説が相譲らず未だに特定されていないが、どうやら九州説が有力となつてきているようでもある。さらには神武天皇の東征説に似た響きで、邪馬台国が大和に移つて大和王権の祖となつたとの推論もあるが、大和地方における古墳の埋葬品などからして、かなりの迫真性をもつて語られている。仮にそうであるならば、景行天皇の九州巡幸は父祖の地である九州に大いなる感情移入があつた

ことであろう。

時代はぐつと後のことになるが、第二十六代継体天皇陵の棺が、熊本県宇土市に産する馬門石（阿蘇のピンク石）を刻んで造られていたことは周知の事実である。継体天皇は、その前帝武烈天皇の代で断絶の危機にあつた皇統存続のために、応神天皇五代の孫である継体天皇が奉じられたとされている。では、宇土市から大和まで、どのような方法で馬門石が運ばれたのか。これを実証するため、平成十七年七月から八月にかけて、大王の棺実験航海が壮大なスケールで実践された。その際我が口之津港が第一寄港地に選ばれ、歓迎セレモニーが盛大に挙行されたことは記憶に新しい。陵墓に眠る継体天皇の棺が宇土市の馬門石で造られていたことからみて、当時の天皇家はふるさと（九州）回顧の念が強かつたであろうことを付記して本稿を終えることとする。



画：林田亭夫

漢詩と短歌

「焼酎「青一髪」と湯川博士夫妻と」

私が焚場（栄町）ン 「久保酒屋」ン 久保長一郎君と一杯やりよつた時、焼酎ン話ンはずんデ、話題は「久保酒屋」の銘柄「青一髪」になりました。

「おいげん焼酎ン名はね……」と長一郎君が語り始めたのです。



< 焼酎「青一髪」 >

「おいげん父チャンの島原ン宮崎康平さん（まぼろしの邪馬台国の作者）の所ン遊び行かしたとき、康平チャンのお

山本芳文

前ねん焼酎ン名は青一髪テ付けんネて言わしたとゲナ、『頼山陽』テ言う詩人の「泊天草洋」バ詠んだ詩のなかに、『青一髪』テ出てくるとバイて言わしたとゲナ」

私は「へえ！」と声を出してしまいました。名の謂われについて考えたことはなかったからです。

独り合点で、「青一髪」を飲んで酔いが廻つてくると、我が本性が脳裏をさ迷い、隣にいつしか黒髪の女が現れて一緒に飲んでいるのです。女は絶世の美女である。ところが、ちょっと脇見をしているうちに女は消えている。あとに一本の黒髪が落ちてくる。その髪をそつとつまんで眺め、しみじみと名残りをおぼえているような、そんな風情を味わつて酔つていたのです。

宮崎康平さんの名が出てきたり、頼山陽という詩人の名まで出てきたのには、ちょっと驚きました。

長一郎君に「それで、その詩はあつとナ」と聞くと「ある。要るなら明日やるケン」ということになりました。